発達勉強会　　R.5.6.17

瀬戸山　悠先生

＜知的障害の基礎理解＞

〇知的障害…同年齢の水準に達しておらず、個人差がかなり大きく、個々の事情にあった具体的な指導と特別な支援や配慮が必要である

・知的能力障害群はあくまでも病態像であり、一定の原因による病患名ではない

・発達期（おおむね１８歳まで）に発症し、概念的、社会的、および実用的な領域における知的能力と適応機能両面の困難を含む　※IQ だけでは整理できない

→継続的な支援がないと、多岐にわたる環境において、複数の日常生活における機能が限定されてしまう

〇知的障害とは、知的機能の欠如、適応機能の欠如

①　知的機能の欠如　　基準…臨床評価と知能検査

知能検査→平均１００、標準１５の検査では知能指数（IQ）７０未満を低下と判断する

※ただし、知能指数の値だけで知的障害の有無を判断することは避けて、適応機能を総合的に評価し、判断する

②　適応機能の欠如　基準…日常生活に支障が生じているため、何らかの援助を必要とするもの、家庭や学校・職場での適応能力を総合的判断

適応機能→日常生活でその人に期待される要求に対していかに効率よく適切に対処し、自立しているか表す機能、食事の準備・対人関係・お金の管理などを含むもので、年長となって社会生活を営むために重要な要素となるもの

〇知的能力障害の診断

原因や状態像を明らかにするための情報となる、知的検査を実施

(検査)田中ビネー知能検査 V、ウェクスラー式知能検査、Vineland- II 適応行動尺度

〇程度別の分類→軽度　中等度　重度　最重度

IQ 値と日常生活水準の両方を考慮し、差があるときは、判定で日常生活能力水準を優先する

〇知的障害のあるこどもの特性

①　認知機能の遅れ、精神発達（知的発達）の遅れ②認知機能の特異性③学習された無力感

知能とは物事を理解したり判断する力のこと

※知能指数が高いから頭が良いということではない為、知能指数を参考に一人一人の得意分野・不得意分野を上手に把握して、多岐にわたる支援をしていくことが大切

〇知的障害と発達障害

共通点…本人のわがままや努力不足が原因ではない、脳機能の障害などが原因、学習・仕事・対人関係などの障害が生じている

⇒年齢とともに成長していく部分もあり、障害がありながら適応していく

〇境界知能…IQ70～85 の範囲を示すとき⇒知的障害とは判断されないけれども困難を抱える

※IQ85 未満だと、通常学級の授業いついていくことが難しいことも多い⇒困っている子どもだと認識されず、サポートされていない
・全般的に知能が遅れている知的障害の場合は、発達年齢に合わせて勉強を教えていくことがセオリー
・能力に凹凸がある発達障害は、得意な能力を活かして勉強したほうが学習が有利に進む

支援者は、自分がいままで培ってきた手法がどの子どもの支援にもいいはずだという思い込みを避け、目の前にいる子どもにとって、用いている支援の手法のどの部分が適切でどの部分が不適切なのか、常に点検する必要がある